



巻 頭 言

所 長 山 内 正 彌

「書体に真・行・草の三体があるが、これと同様に建築物にも三様がある。たとえば和室に例をとってみると、柱・鴨居・長押・天井板・床柱のすべてに同材の枳目を^{まさめ}用いたものが真書体ということができ、これは侍が^{かみしも}袴をつけて正座した姿のようで、たいへん格調の高い正式の座敷である。つぎに、これらの部材に板目材が用いられ、床柱に異種の柱を用いたりするのが行書体で、ここでは袴は脱ぎ去り、袴はつけたままのややくつろいだ姿となる。さらに草書体になると、丸柱が用いられ、天井には網代などが用いられる一方、長押はとりはずされる。ずっとくつろいだ形の着流し姿によって変ってこなければならぬのが本来である。」

これは三十年も前、学生時代に受けた建築学の講義の一節である。先生の英国風の端正な姿・ゆっくりとした口調・金釘流の丁寧な板書などが、今もってなつかしく脳裏に浮かんでくるのである。

このように深く印象づけられた理由は、専門教科目としての内容はさておいて、設計者の心構えとして、節度のたいせつなことを教えられたものと深く心に刻まれたことと、その後の実生活における経験や社会事象において節度が問われる問題にしばしば出会ったからである。かつて学んだ倫理学の講義など、すっかり記憶のかなたに行ってしまった今日でも、わずか一時間の、しかも専門科目の講義の中で終生忘れることのない、もっともたいせつな倫理観を、さりげなく植えつけられた先生の人柄を改めて見なおすのである。

「『建築は心の表現』ともいわれ、権力・格式を誇る城廓、尊厳を象徴する社寺、わび・さびを求めた茶室などに、作者・建て主の心が表現されている。一面、建物はその時代の思想・宗教・政治・経済・風俗習慣などが背景となって造られており、時代考証の重要な資料ともなっている。いいかえれば建物はその時代の相をあらわし

ているのである。

そこで、この二十数年間の我が国の建物の変化を見てみると、戦前に比べて、想像もつかないほどの著しい変化があり、高層化と豊富な色彩がとくに目立っている。これは高度経済成長や、技術革新のもたらした結果であるが、住居について見ても、とくに居住性の向上はすばらしいものである。和風と洋風が混然となり、中には奇異と思えるような表現さえ見られるようになった。いわゆる純日本風の建物は特別の場合か、建物の一部にその面影をとどめているに過ぎない。そこには明るい、自由な、思い思いの姿が見られるのである。真・行・草といった区分も判然としないもの、これが新しい感覚というもののかも知れない。

さて、建物は思想を具象化したものであるという見方からすると、未だかつてないこのような住居の変化は、戦前から戦後にかけての思想の変化・価値観の変化がいかに大きいものであったかを示しているといえよう。従来の固定観念では理解できない面が多くでてきたのも無理もないことと思う。

一方、このように進歩した住宅でも、欠点が見え始めているのである。すなわち、停電時の機能停止、新建材による有毒ガス、さらに汚水処理など公害にかかわる幾多の問題などである。これらはすべて、はじめにのべた人間の節度にかかわるものであって、前後の脈絡を考えないところにおこった弊害であろう。古いものはだめときめつけて、新しいから、美しいから、便利だからと簡単に飛び込むことによって思わぬ失敗に終わることがままあり、日本人は短絡的な面をもつといわれるだけに注意しなければならないことである。

その意味において、次代を背負う子どもたちに、真・行・草の節度ある新しい日本住宅を建築していく心構えをしっかりと植えつけることが、今日の教育にもっとも要望されていることなのではなかろうか。